

令和8年度「米原市学力状況調査」の結果について

1 調査の概要

(1) 調査の目的

米原市では、児童生徒の基礎的・基本的な学習内容の定着を図るため、平成17年度から学力状況調査を実施している。

この調査は、学習内容の理解度を測る「教科学力」とともに、その背景となる「学習意識」も客観的に調査し、米原市の児童の学ぶ力の実態を多面的に把握するものである。

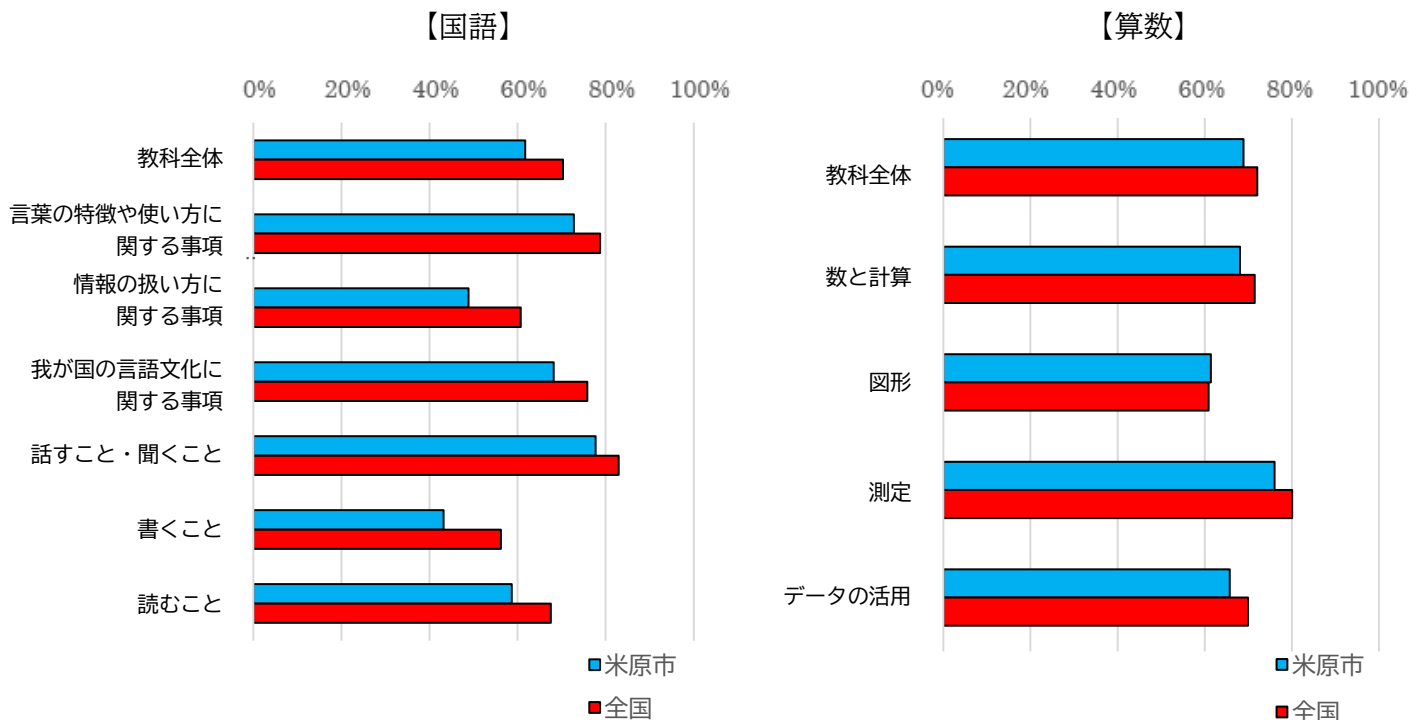
そして、その結果を分析し、各学校の実態に応じた授業改善へとつなげていく。さらに、学校が児童生徒一人ひとりの学習定着状況を把握し、的確な個別指導を行うための一助とする。

(2) 調査の対象および内容

- ・調査対象 … 小学校第4学年（市内9校）298人
- ・調査内容 … 標準学力調査 国語・算数の2教科（各40分）
質問紙調査 「自己認識」「社会性」「学級環境」「生活・学習習慣」
「米原市独自の質問」（40分程度）
- ・調査期日 … 令和8年5月25日（月）～5月29日（金）のうち各校が定めた日

2 標準学力調査の結果

(1) 標準学力調査の平均正答率



国語科は、すべての項目で全国平均を下回っている。算数科は、「図形」の項目で全国平均をやや上回っている。両教科に共通して、問題文から必要な情報を取り出し整理するとともに、何を問われているのかを的確に捉え、自分の考えを表現する力に課題が見られた。

(2) 学力調査の問題（一部抜粋）

〈正答率が高かった問題〉

国語科「漢字 読み」

2

次の問題に答えましょう。

(1)

次の文の――線の漢字の読み方を、ひらがなで書きましょう。

456

① 家で勉強する。

② 歯が生える。

③ 兄は走るのが速い。

〈全国平均と比較して差が大きい問題〉

国語科「書くこと」

7

四年一組(二十人のクラス)では、運動会のクラスのスローガンを作ることになりました。次は、スローガンの「れい」です。

「れい」

・深めよう、みんなのきずな

スローガンを作るときには、次のアとイの方ほうのうち、どちらがよいと思いますか。あなたの考えを、下の〈注意する点〉を守って書きましょう。

2222

ア 一人ずつスローガンを作って、その中から、クラス全員の投ひょうで決める。

イ グループに分かれてスローガンを作って、その中から、クラス全員の話し合ひで決める。

〈注意する点〉

① 六行から、八行で書くこと。解答用紙の◆から書き始めること。

② 二つの段落に分けて書くこと。

③ 一つ目の段落には、アとイの方ほうのうち、どちらがよいと思うかを書くこと。

④ 二つ目の段落には、アとイをくらべながら、その方ほうがよいと思う理由を書くこと。

○ 漢字の読みについては、正答率が9割強と特に高かった。

● 自分の考えを書く問題では、無解答の児童は少なく、書こうとする意欲はうかがえた。しかしながら、正答にいたらなかった児童については、複数の条件を正しく読み取り、その条件を満たして記述することに課題が見られた。

〈正答率が高かった問題〉

算数科「二等辺三角形の作図」

- 11** コンパスとものさしを使って、次の三角形をかきましょう。ただし、コンパスでかいた線は、消さずにのこしておきましょう。答えは解答用紙にかきましょう。

辺の長さが6 cm、7 cm、7 cmの二等辺三角形



〈全国平均と比較して差が大きい問題〉

算数科「円と球、三角形」

- (1) 直径17mmのビー玉が、あなから落ちるようにするためには、あつ紙にくりぬく円の半径は何mmにすればよいですか。次の1～3から1つえらびましょう。また、その番号をえらんだわけをせつ明しましょう。

- 1 6mm
- 2 8mm
- 3 10mm

- 二等辺三角形の作図については、正答率が8割を超えた。
- 直径と半径の関係については、理解している児童が多いものの、3割の児童はその理由を適切に説明できなかった。

3 質問紙調査の結果

(1) 質問紙調査の肯定率

① 「肯定率」とは

肯定率…4 択の質問のうち、良好な回答 1、2 の合計のこと。

② カテゴリー分類

- I 自己認識 ⇒ 『愛されているか』…「家族のささえ」「友だちのささえ」「先生のささえ」
⇒ 『自己肯定感』…「成功体験と自信」「充実感と向上心」「他者からの評価」
「感動体験」
- II 社会性 ⇒ 『ソーシャルスキル』…「規範意識」「思いやり（人間関係構築力）」「発信力」
「対話・話し合い」
- III 学級環境 ⇒ 『学級風土』…「学級の規範意識」「学級の絆」
⇒ 『リスク管理』…「いじめのサイン」「対人ストレス」
- IV 生活・学習習慣 ⇒ 『生活習慣』『学習習慣』『学習意欲』

③ 小学校第 4 学年の肯定率

分類		米原市	全国	全国との差
I 自己認識	① 家族のささえ	92.7	91.3	1.4
	② 友だちのささえ	88.5	86.7	1.8
	③ 先生のささえ	84.5	83.5	1.0
	④ 成功体験と自信	87.9	86.0	2.0
	⑤ 充実感と向上心	89.7	86.9	2.8
	⑥ 感動体験	79.6	79.5	0.1
	⑦ 他者からの評価	69.7	65.5	4.2
II 社会性	⑧ 規範意識	82.4	82.2	0.3
	⑨ 思いやり（人間関係構築力）	90.0	87.9	2.1
	⑩ 発信力	68.2	63.8	4.4
	⑪ 対話・話し合い	88.6	89.9	-1.3
III 学級環境	⑫ 学級の規範意識	73.4	70.0	3.4
	⑬ 学級の絆	90.7	87.4	3.3
	⑭ いじめのサイン	84.8	82.5	2.4
	⑮ 対人ストレス	64.2	62.0	2.2
IV 生活・学習習慣	⑯ 生活習慣	76.8	75.3	1.5
	⑰ 学習習慣	51.5	55.0	-3.5
	⑱ 学習意欲	78.1	76.7	0.0

最も肯定率が高い質問

「あなたのクラスには、いいところがあると思いますか。」 97.7%

最も肯定率が低い質問

「あなたは、学校生活の中で他の人が発言したり、発表したりするときに、質問をしていますか。」 55.4%

全国と比較して肯定率が高い質問

「友だちと意見がちがっても、自分が正しいと思ったことは、主張できますか。」 79.2% (+10.9%)

全国と比較して肯定率が低い質問

「学校の行事や活動の中で、あなたの心にのこっていることがありますか。」 81.2% (-4.9%)

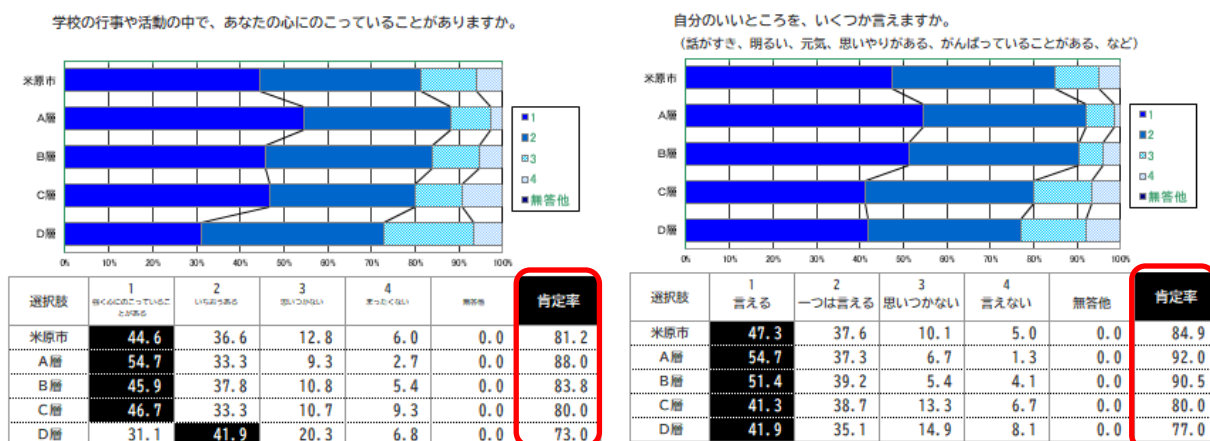
「充実感と向上心」「他者からの評価」「思いやり（人間関係構築力）」「発信力」「学級の規範意識」などの人とのつながりや学級環境に関する項目は、全国と比較して肯定率が高い。

一方、「学習習慣」は肯定率が約 5 割であり、授業以外の時間における学習について指導・支援することが求められる。

(2) 学力調査結果とのクロス集計

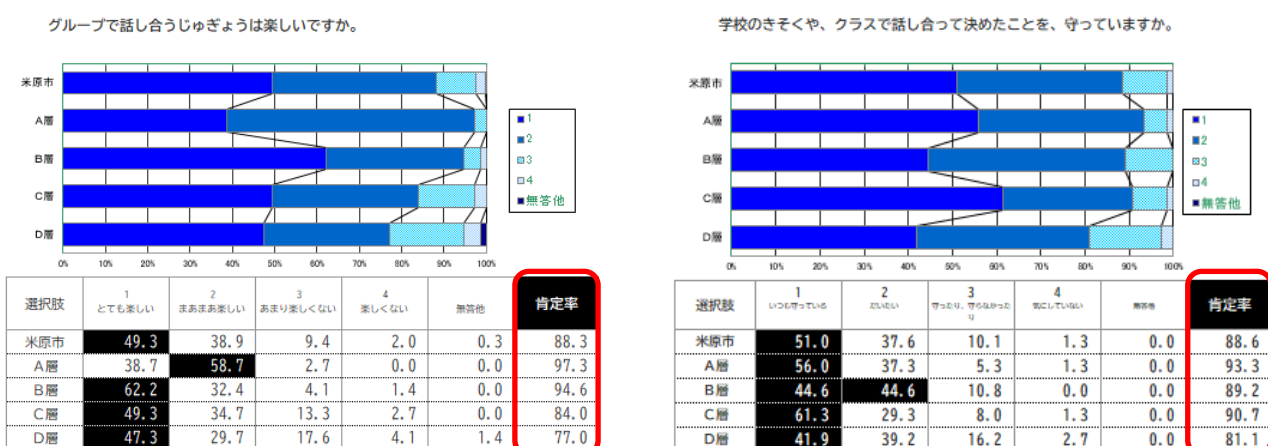
※ 標準学力調査の受検教科平均正答率で4等分し、上からA層、B層、C層、D層と分けています。

① I 自己認識



学校行事や活動の中で心に残る経験がある児童ほど、学力が高い傾向が見られた。また、自分自身を肯定的に捉え、よいところを複数挙げることができる児童ほど、学力が高い傾向が見られた。

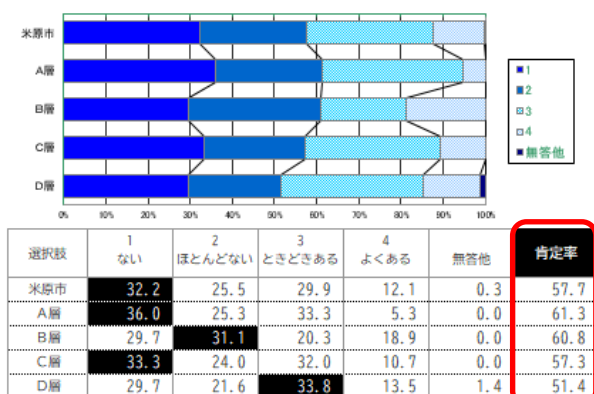
② II 社会性



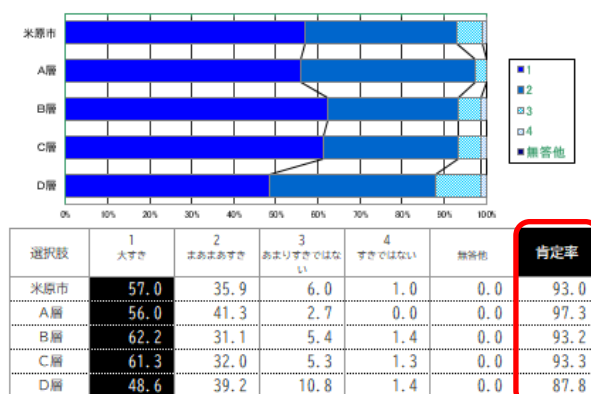
「グループで話し合う授業は楽しい」と感じ、「学校の規則やクラスで話し合って決めたことを守っている」児童ほど、学力が高い傾向が見られた。

③ III 学級環境

学校に行きたくないと思うことがありますか。



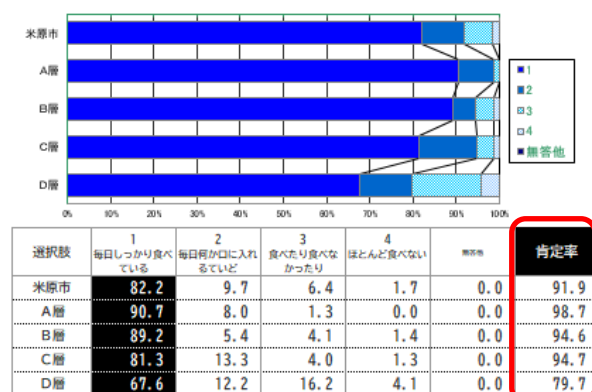
今のクラスが好きですか。



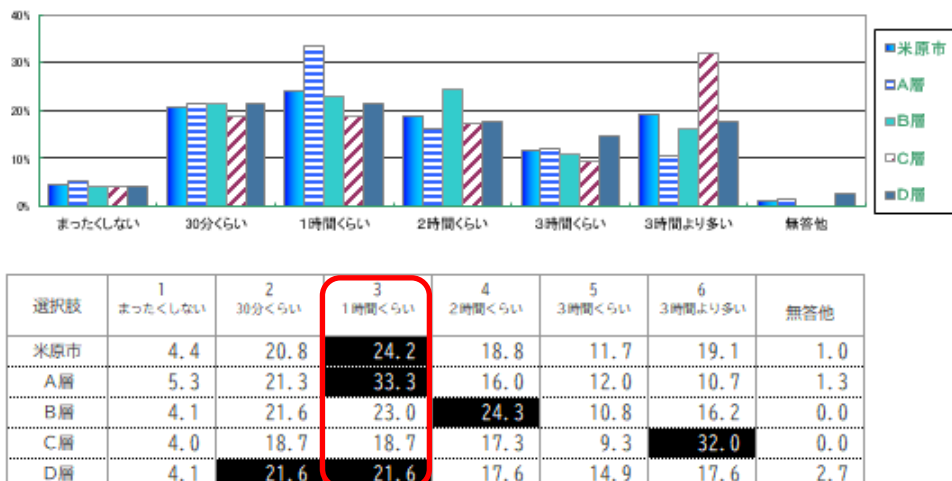
「学校に行きたくないと思わない」「今のクラスが好きだ」と回答した児童は、他の対人ストレスに関する項目においても肯定的な回答が多く、学力が高い傾向が見られた。

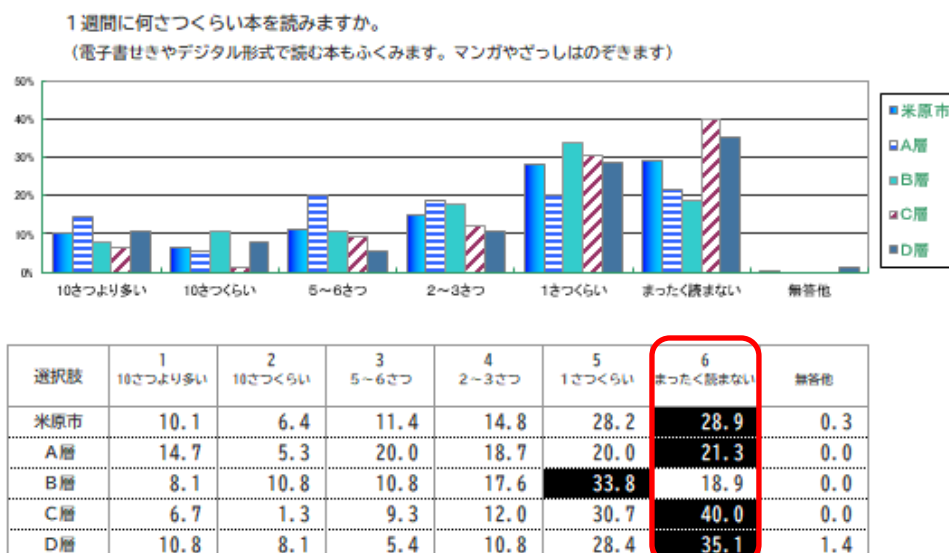
④ IV 生活・学習習慣

朝ごはんを、毎日食べていますか。



平日（月～金）は、1日にどれくらいテレビや動画を見たり、インターネットを使ったり、ゲームをしたりしますか。





ほとんどの児童が朝食を摂っており、基本的な生活習慣が定着している。一方、テレビや動画を見たり、インターネットを使ったり、ゲームをする時間が3時間より多い児童は、学力が低い傾向が見られた。

また、読書量と学力との間に明確な相関関係は見られなかったが、1週間に本を全く読まない児童はC、D層に多い。

4 考察

今回の学力調査では、国語・算数ともに全国平均を下回った。

国語では、漢字などの基礎的な知識が身に付いている一方で、文章を読み、問題の条件を正確に捉えて答えたり、自分の考えをその理由や根拠とともに説明したりすることに課題が見られた。

算数では、四則演算などの基本的な計算はできている一方で、小数や分数など、数の概念の理解を要する計算問題に課題が見られた。

これらの結果から、今後は「正しく解答する」だけでなく、「なぜそう考えたのかを説明する」「文章の内容を正確に理解し、問題の条件に従って答える」といった学習を大切にしていける必要がある。授業の中でも、言葉に加え、数や式、図、表などを使って自分の考えを表現する機会を増やす必要がある。

また、今回の質問紙調査では、朝食の摂取状況や動画・インターネット、ゲームの利用時間など、生活習慣・学習習慣と学力との間に相関関係が見られた。

そこで、小学校では、デジタルフォローアップドリルやeライブラリなどを活用し、一人ひとりの学習状況に応じたきめ細かな支援を進めていくとともに、家庭と連携し、生活・学習習慣の改善を支えていくことが必要であると考えます。

さらに、目標に向かって諦めずに取り組む「粘り強さ」を備えている児童が多いことが分かった。努力が実を結んだ成功体験が、子どもたちの自信や得意意識を支えており、各校における多様な実践を通じて、自己肯定感・自己有用感が着実に育まれていると考えられる。

こうした取組を学校と家庭、地域がともに進めることで、子どもたちが自分のよさや可能性を信じ、主体的に学び、心豊かにたくましく成長していける「米原っ子」を育てていきたい。